

1

本書の「モイラ言語」という題名だが、「モイラ」はギリシア語で「運命」である。わたしの知るかぎり、著者にはこれまで『根拠よりの挑戦』『哲学の現場』というギリシア哲学研究を主軸にした二著と、格別その軸にこだわらずに論議^{議論}を選択し、主題別にまとめた著作集四巻とがある。しかしそれらを読んで気付くことは、この著者が書名に対してきわめて厳密なことである。読後に振り返れば、その書名が書中の一文一文のみならず、一言一句を支配しているに思い当たるのである。これは本書のキー・ワードの一つである「縮重」の例だろうが、以下では、『モイラ言語』という書名に著者が何を籠めたかを展開することにしよう。

さて、哲学に対する著者の基本的な姿勢は、前出の《根

拠よりの挑戦》そして《哲学の現場》という書名に端的に表れている。短文なので繊細さを欠いた極め付けとなってしまうが、『モイラ言語』の著者にとって最も中枢の問いは「わたしとは何か」である。われわれはともすれば、このような問いは「自分が」立てて「自分が」答えるものだと思っている。

また世間からすれば、このような問いに迷う人は、暗く弱々しいエゴイストである。しかしそれではかつてその問いに生涯をかけたソクラテスの高邁^{こうまい}な潔さ、明るさ、愉快さは何だったのか。それはソクラテスが、その問いを「問うて」なかったからだと著者は言う。むしろソクラテスにとって、それは自分を生かしてある根源的な力動たる《根拠》から「問われた」問いであった。《根拠》はわれわれに「生きる意味」を教えるものでなく、《根拠》はあくまで問う者である。そして問われているからこそ、

その問いに取り組むことは自らの生きてある証し、生きている実感ともなる。哲学の問いは人間的にしつらえるものでなく、根拠から「問われた」ものでなければならぬ。これが、「根拠よりの挑戦」に籠められた意味であった。

2

一方そのような問いに対して、われわれの答え方、応じ方が問題になる。学説（＝理論）によって問いを立て、新たな学説によって答える方式を、著者は「思想」と呼んで哲学とは厳格に区別する。理論は答えを求める人間が立てる「捜査方針」であり、事実解釈の網である。しかし方針を決めた捜査班がその方針によって縛られ、当然見えるべき証拠を現場に見落とすように、理論は現実が提出する問いからわれわれの目を外らさせる。

理論にとって、現実とは自らの世界を構築する出発点として利用すべきものに過ぎない。だがわれわれが刻々生きている現実とは、根拠からの問いが現れている唯一の場なのだ。著者は言う。現実とは理論的解釈の材料ではなく、哲学が問題を見出す唯一の場所であり、かけがえない

問いの出発地点である。この主張を標題化したのが「哲学の現場」である。

著者の基本姿勢にまず言及したのは、『モイラ言語』が上に続くギリシア哲学研究の第三著だからである。上記の基本姿勢とは別に、この三著はもちろん内容的に連続している。

その紹介に先立ってお断りしておくが、評者はギリシア哲学を専門とする者ではない。そのため著者がギリシアの哲学者達とどのような話をしたか、話が噛み合っていたかを直接聞き取れる立場にはない。しかし著者にとっては、前述の「現場」にギリシアの哲学者たちをテキストという形で立ち会わせ、いかに問題を共有し、討論するかが最重要のことである。そこで評者は、いわば著者からの「又聞き」を自己流に整理することで問題を共有することにする。

さて、この三著を貫く流れの中心にあるのは、「先言

「措定」という考えである。一般に哲学は、われわれが日常生活や科学の基盤として承認するこの事実世界が、実は人間によって作られたものであると確認するところから始まる。絵画的に言えば、事実の世界とは根拠の大海に浮かぶ人工島である。われわれは自らを根拠から隔離する代わりに、その島の中で安定した人間としての生活を確保しているのである。

しかしわれわれが身をもって生きる限り、この島は不可欠である。われわれが身をもって生きていることに意味がある限り、この島をただ破壊すれば良いのではない。根拠の大海に投身して全て解決するならば、われわれが身をもって生きていた意味を問う必要もない。またそれならば根拠の大海といえど、われわれが強いてそこに投身する理由もないであろう。

それではどうすべきか。人工島の地盤を貫いて、根拠の大海に触れる井戸を掘る以外あるまい。この島の地盤は、言語という地盤であると著者は言う。それゆえ著者は、この地層重なる人工島の地盤を一層一層掘り進んで

ゆく。この過程が、上記三著の流れであると言って良いと思う。

この比喩を今少し続けよう。人工島の最も表層にあるのは、生活のためにわれわれが情報を伝達しあう日常言語、言い換えれば、主語―述語構造を基本とする強固な地面である。

しかし著者によると、この地面は本来異質な二種類の言語機能が複雑に入り組んで出来たものである。その一方は、主語に典型的に見られるように公共的な「指示」を成立させる機能の層である（著者はこれを「物言語」と呼ぶ）。

そしてもう一方は、述語に典型的に見られるように、発話者が「自分の」考え、「こころ」を語る私秘的な機能の層である（これは「こころ」言語と呼ばれる）。機能的に見れば異質な二種類の言語を、われわれは言語の日常用法にかまけて一枚板のように考えている。だが、それらの言語が成立するために要請される条件は全く違う。

じつさい物言語を可能にする条件、例えば「このイヌ」

という指示が成り立つ条件は、著者によればイヌである限りの、またそれ以上の何でもないイヌ個体が並列的に成立していることである。つまり「イヌ」なる種を表す語によって、「かけがえある」イヌ個体が「掴ま」れていることが条件である。これに対し「こころ」言語を可能にする条件は、私秘的な言語の拠点たる、わたしである限りの「わたし」が並列的に存在することである。このように言語という地盤を機能ごとに分類するとき、それぞれの言語機能を成立させる条件はそれらの言語を可能にするもの、言語に先立つものでありながら、通常言語内部で語られることはない。それを著者は「先言措定」と呼ぶのである。

この点から見ると、大きく言って第一著の『根拠よりの挑戦』では先言措定の存在することが指摘されたのに対し、第二著の『哲学の現場』では先言措定の働きの分析、およびそれらによって成立する物、「こころ」という二つの言語機能の対比分析がなされたといえよう。

3

それを受けた本書では物言語と「こころ」言語という概念を軸として、パルメニデス、ソクラテス、プラトン、アリストテレスの方法を整理し、その上で、現場のうちに根拠の業（わざ）をいかにして証するか（同時にそれは、己の何たるかを証することでもある）が探究されることとなる。

問題はこうである。著者によれば、われわれの世界を作り上げている地盤は物言語と「こころ」言語である。物言語は、われわれの生活行動の舞台である公共的な地平を成立させる。だがそれは公共性を保証する反面、哲学や科学を含む学問的問いを抹殺してしまう。物言語の働きは、その場その場で典型的な対処行動を可能にすることである。つまり断片的で平板な、問いのない生活世界を構築するのが物言語なのである。それゆえ「こころ」は、己を問い、根拠へと向かう方向性は期待できないであろう。

他方「こころ」言語は行動的な対処を停止させ、われ

われ一人ひとりに自己完結した世界を形成させる働きをもつ。それゆえそれは、生活知に対する学問知の舞台を用意する探究の言語である。科学や文学を成立させ、「根拠よりの挑戦」にアンテナを張るのも、この〈ところ〉言語である。だがここには、自閉性という枷がはめられている。人はここであくまでも〈わたし〉の世界を脱することが出来ず、(根拠との出会いも含めて) 出会いを拒否した世界に籠ってしまふのである。

一言で言えば、〈ところ〉言語は、個々人に自分を仮の原点とした極座標系を作らせる。しかしそこでは、仮の原点はいつまでも仮の原点、つまり〈わたし〉は〈わたし〉以上ではなく、〈わたし〉が何なのかは永久に知れないのである。

これを別様に表現すれば、二つの言語は可能性の地平を披くに過ぎないことである。物言語の与える世界は、定型行動の選択肢からなる断片的空間である。だがそれを離脱した〈ところ〉の世界も、端的に言えば事実に対する解釈の選択肢の一つを与えるに過ぎない。わ

れわれは目前の現実根拠の業を見るよりも、自らが見意した選択肢の一つにそれを貶めることで安心を得ている。これを著者は「言葉の萌効果」と呼び、いかにしてそれを突破するかを本書の中心課題に据えているのである。

4

その手懸りを、著者はアリストテレスの本質論に求める。著者がアリストテレスから読み取った筋書はつぎのようなものである。萌効果は、言葉が可能性の並列する空間を披くことに起因する。それではどこかに、可能性の並列を許さない言葉の例はないだろうか。それは〈ところ〉言語に見られる「縮重」という現象である。縮重とは、ある人の〈ところ〉言語全体が一つの根本的な言葉によって統合され、率いられることである。ここでは根本語という頂点からの指示によって、それぞれの場合に「ここではこの言葉しかない」ことが否応なしに決められる。言い換えれば、根本語に〈わたし〉の全経験が

集約されることによって並列する選択肢(言葉の選び)が消え、その意味で可能性言語の地盤を破るドリルが整う。

視覚的に言えば、縮重とは〈わたし〉という自閉空間が根本語を尖端とした一定の方向性を獲得することである。だが〈ところ〉言語(典型は詩の言語)の場合、縮重の方向はひたすら物言語地平からの離脱に向けられている。そのように出会いを拒否しつつ〈わたし〉内部で縮重が生じるため、〈ところ〉言語における縮重は〈わたし〉の現実離れと自閉を強化する以上ではなく、却って全体としては「現実の解釈の一つ」という可能性に止まるのである。

それゆえ縮重した〈ところ〉言語のドリルとしての性格を生かし、かつその自閉性を破るには、現実離脱の方向性を逆転する以外ない。そこでアリストテレスは、物個体との出会いにおいて縮重を生じさせる戦略を取ったと著者は言う。われわれの生活現場には、物言語によってかけがえある個体世界が開けている。そのような個体

は、日常的なレヴェルでは〈わたし〉とは独立した存在である。しかし、そのような個体との出会いの中で縮重が生じるとき、われわれはまず日常の個体が成立する以前の、物言語を成立させている地層に突入する。

しかしアリストテレスが説明したところでは、この地層は実は出会いそのものの地平、その意味で〈わたし〉と出会ったものが最早独立とは言えぬ、いわば〈ところ〉言語と物言語が分かれる直前の世界であった(著者によると、これが本質論の地平である)。しかし縮重によってこの地層が更に突破されたとき、当の出会いの可能性の萌をはぎ取られ、これ以外ありえぬ必然なるもの、根拠の業としての姿を現すであろう。そしてここでは、〈わたし〉もまた出会ったものも世界の全体にとって不可欠必然な、かけがえのない存在として証されるはずである。物個体との出会いを機縁として、縮重によって到達されるこのような言語がエネルギー言語であり、著者によれば、アリストテレスが書いた根拠に至る究極の筋書は以上のようなものであった。

エネルギー言語は、たしかに可能性言語の藁を破る言語の一位相を示した。しかし著者は、このエネルギー言語をもつてしても自己を証することは出来ないと言う。そしてそこから「アリストテレスを超えて」モイラ言語の探究が始まる。これこそが著者にとって本書の最終課題なのだが、著者自身も認めるとおり、モイラ言語の機構は探究途上である。それゆえ以下では評者の憶測を交えつつ、著者の戦略の見取図を描いてみよう。

著者はエネルギー言語に何が不足していると考ええるのだろうか。「モイラ」という重々しい言葉が初めて導入された箇所では、エネルギー言語はあくまで出会いに内在する状況から披けるものだが、出会いそのものを設定する仕組み、すなわち運命は依然として不明だと言われている（一〇三ページ）。エネルギー言語は、物個体が実は一つひとつかけがえのないものであることを明かした。だがそれは出会いの後に明かされるのであり、

そもそもかけがえのない個体同士がどのように出会わされるべく、この世に送り込まれてくるのかは不明である。そしてそれを明かすものが「モイラ言語」だと言われるのである。

ただし著者は、アリストテレスの理論に欠陥があると主張しているのではない。エネルギー言語の地平が虚偽だと主張しているのではないし、出会いに内在する視点だけでは自己を証するに足りず、外在的な視点も必要だなどと言っているのでもない。むしろ著者は、日常刻々生きるわれわれが「自己を証する」根本的に異なる方式があること、そしてそこでは新たな問題を射程に入れねばならないことを言いたいのである。

このように著者は、「かけがえのないもの」が成立する基盤には「とりかえしのつかない事ごと」があることを見る。それゆえ、この「とりかえしのつかない事ごと」がいかに必然であるかを語るのがモイラ言語の使命であると言っている。しかし、取り返しのできない事ごととは何か。それはまず第一に、われわれ人間が生まれてか

ら死ぬまで刻々となす行為、以外にありえない。

行為には、エネルギー言語になかった三つの契機が含まれている。行為するおのれの身と、行為される他者（人）と、時間である。言い換えればモイラ言語を俟ってはじめて、われわれがこの身をもって生きる意味、他者が存在することの意味、そして死が語れるはずなのである。そこで本書の考察はそれらを軸に転回していくが、本書はおそらくモイラ言語というものの存在を（エネルギー言語と対比しつつ）提起することが最大の目標だったと思われる。じつさい著者の努力は、そのような言語があるとしたらどのような条件を満たすべきかの探究に向けられており、具体像が提示されているわけではないからである。

ただ評者の憶測では、人びとが行為によって互いに身の影を落とし合う場で前述の縮重を起こし、モイラ言語の位相を開披しようというのが著者の戦略のようであ

る。しかしそのさい重要なことは三つあると思う。

第一はもちろん「取り返しのできなさ」の構造の研究であり、これは著者自身が「過去はなぜ不変か」という時間の問題としてすでに本書中で扱っている。しかし本書では手薄な面があと二つあると思われる。一つは縮重の意味の確定である。縮重の眼目は、言語によって張られた藁を言語それ自身の機構によって突破することである。しかしそれは本来「こころ」言語の特性であったにもかかわらず、「こころ」言語、エネルギー言語、モイラ言語は、それぞれ縮重の機縁が異なるだけでなく、縮重自体が異なる機構をもつはずである。それゆえそれらの機構を「縮重」の一語で括ることなく個々に確定すること、逆に言えば藁自体のより精確な構造探究が重要な課題となるのではなからうか。

今一つは他者に関してである。著者は「物・個体」という考えで他者を表現しようとしているが、これはモイラ言語にとって最も重要な概念のはずである。なぜなら、前述したように行為によるわたしの身の影が他者の変容

を促し、そこに縮重の機縁が得られると考えられるからである。だがそのためには、他者はそのような縮重を被りうる構造をしていなければならない。

エネルギー言語では物個体の変容が眼目であり、そこで本質論言語の位相が注目された。モイラ言語でそのような位相が発見されるとすれば、それはおそらく他者の存在様式の探究をおしてではないだろうか。実際物の変容に、おのが身の影が必要なことだけが眼目であるならば、エネルギー言語とモイラ言語の差は、いわば日食と月食の差に過ぎず、後者が前者を超えるものとなるまい。しかし「物・個体」という考えがその任に耐えうるのだろうか。疑問を呈しておきたい。

評者はこれまで相当大胆な解釈を試みてきた。それゆえこれは書評と言うより、評者個人の読書ノートに近いものになってしまったかも知れない。それはお詫びする以外にないが、敢えて弁解をさせて頂けば、それは本書がルートを整理したガイドブックのような性格のもので

はなく、格闘の跡の生々しい登山記のようなものだからである。評者も二番煎じであれ、自ら著者の跡をたどらねばならないと考えたのである。それゆえこの独断的な書評を読まれた方は、本書をそれぞれ自らの立場で実際に読まれることを希望する次第である。なお東京女子大学の荻野弘之氏には、モイラ言語に人間が必要であるという貴重な示唆を頂いたことを感謝します。

(東京大学出版会刊)

(いとうしゃっこう・放送大学助教授)